発　行　熊本県民医連　　発行日　２０１８年８月１３日　第１２号

県連ニュース

発行者：木原　望

ＴＥＬ：096-387-2826
ＦＡＸ：096-381-5442

西日本豪雨災害支援第2陣（7/20-7/23）

西日本豪雨の災害を受け、2年前に全国の民医連の仲間に支えられ、助けられ、励まされて、多大な困難を乗り越える勇気をいただいたことを改めて思い出しました。そして現地から求められる支援に、たくさんの職員を熊本から送りたいと思うと同時に、自分も行きたいと思い、今回参加させていただきました。

まず感じたことは広島での報道の多さです。熊本ではすでに報道が殆どなされません。熊本地震のときも熊本以外では、おそらくこのような状況だったのでしょう。報道がなされなくなると、忘れるスピードが速まります。忘れてしまうと被災者の苦しみはさらに深くなります。しっかりと記憶し続けること、そして苦しみのただなかにいる被災者を忘れないことがまず大切であると感じました。

現地に入ってはその被害の大きさに驚くと同時に、熊本地震よりも復旧・復興にかかる時間はかかると感じました。被害が広域化していることもあり支援が足りません。また熊本地震と違い土砂が大量に家屋や道路に流れ込んでおり、これを取り除くのに一体どれだけの時間がかかるのか想像もつきません。1日目に支援に入った家は一階に土砂が50センチほどつもり、大きな家具も含めて土砂に埋まり、すこしカビの匂いがする。また大きな丸太が壁を突き破り家の中まで入りこむと同時に壁に数か所穴が開いている家でした。高齢の女性が一人で暮らしていた家です。大きな家具を家の外に運び出し、たまっている土砂を外に出す作業をしながら「この家は半壊にはあたるから泥をだしても、公費で解体されるのでは」と考えましたが、その後の現地の人の話を聞き大きな驚きと同時に怒りがわきました。支援に入る家は現地の方が割り振りをしているが、公費で解体される対象となる家には支援は入っていないとのこと。以前、熊本地震後に対政府交渉で内閣府の方と交渉したとき内閣府の役人は「一部損壊は日常生活に支障がない程度の被害だから特に支援は必要ない。たとえ屋根が壊れて雨漏りしても一部損壊と判断されているなら日常生活に支障がないということ」と話していたが、今回支援した家は、たとえ泥を掻き出したとしてもとても生活がおくれる家ではない。事実から被害を認める必要がある。何としても被害を認めてもらえるような働きかけが必要だと強く感じた。

また1日目2日目ともに支援する時間は暑さの関係もあり、限られた時間であった。進んでいるのだが、ほとんど進んでいるとはいえない。酷暑と災害で、被災者の苦しみは本当に深いものがあると感じる。だからこそ、忘れていないことを発信し続け、できる支援を継続することが必要だと感じた。もっともっと支援が必要。熊本からの支援を送り続けたい。

熊本県民医連事務局長　木原望

7月21日、22日と広島県の豪雨災害支援に参加させてもらった。実際に被災地を見ると、それまでテレビやニュースで見ていた時はどこか人ごとであった感じが、実際の現場に行くと物凄さと、悲惨さ等を直接感じられた。坂町の小屋浦地区に支援に入ったが、2人が犠牲になり現在も1人の行方不明者がでており、捜索と復旧作業が同時に行われているような状況だった。支援に入ったお宅では一階部分に大量の土砂や流木が入り込み、土砂等を出してもとても住めそうな様子は無い住宅だった。そこでは高齢の女性一人暮らしで、週末という事もあり息子や親せきが復旧の手伝いに来られていたがなかなか目途が立たないような感じであった。実際に支援に入り土を掻きだす作業を行ったが暑さと多量の土砂で途方にくれそうになる事もあった。２日目は別のお宅の土砂掻きに参加したが、そこは室内までは土砂が入り込まず庭等に堆積した泥を運び出す作業を行った。両日を通して支援した時間は短くあまり変化はなかったが、地区の会長や支援に入った家の人などはいずれも温かく迎え入れてくれ、気を使ってくれるような様子で逆に申し訳なかったのかなと思った場面もあった。短時間の支援で感じた事は復旧までかかる時間はかなりかかると思った。また、切れ目のない支援が必要になると感じた。　菊陽病院　DC　井上　隆一

支援に入ったお宅の上流では何軒か家屋が丸ごと流され、その瓦礫や土砂が庭に腰高くらいまで堆積していたが家屋は一部損壊位の感じだった。しかし生活するには劣悪に感じた。高齢のご夫婦のお宅で、庭は手つかずだった。電気は前日から復旧していた。自宅の前の道は片側に災害ゴミが山積になっていて、軽トラが曲がれないほど道路を占拠していて時間を追うごとにまだ増えていた。近所では小学一年位の子供も半袖、半ズボンに長靴を履き泥かきをおこなっていて、破傷風などにならないか心配になった。夏休み初日なのに遊ぶ場所も時間もないかんじだった。

ボランティアに入って高齢者の健康面が心配になるのと、これから子供たちが窮屈なストレスの多い生活を強いられると思うと、自由に遊べる場所の確保をしたいと思いました。また現在の猛暑と二階避難生活をみると関連死も心配になり仮設住宅が早急に必要だとおもいました。泥かき作業を止めると、熊本地震の時の避難生活や後片付けなど長期に大変だった色々な事を思い出し、今回被災された方達があの時以上に再建の見通しが立てにくい生活を長期に続けると思うと心苦しかった。今回ボランティアに入らせてもらったことは本当に良かったです。

健康共同ファルマ　岡本修

左の写真　健康共同ファルマ岡本修さん）は宮城の　笑顔・写真を届けよう通信」で『したたり落ちる汗』として表紙を飾った写真を頂いたものです。

正直、テレビ以上の現場の光景に絶句してしまった。まず感じたのは土石流での被害状況。どこが河川で道路なのかわからないほどの被害で家も車も埋まっている。地区全体が腐葉土のような臭いで覆われていた。もちろん電気、水は通っていない。最悪の環境だった。水害災害という事で想定はしていたが、今年は異常なまでの猛暑がボランティアを行う上で体力を奪われた。家屋内外かかわらず作業が思うように進まない事にショックといら立ちが混同した状態になった。支援に入らせて頂いた民家も床上約50cm に達するような土砂が室内に流れ込み、家を貫通するような大きな流木があり、全部取り除いてもとても生活できるような状態ではないと瞬時に感じた。しかし住まわれている方に聞けば半壊にもならないと話される。ここが一番唖然とした。今回、熊本からの参加で熊本地震も経験しているが家屋の状況は地震以上に酷いにも関わらず行政の対応がこれでは再建どころではない。現地に入ると毎日のように災害状況がテレビでながされるが一歩県をでると昔のことのように取り上げられない。この流れが風化を助長していると感じる。熊本地震でも同様に感じた。被災者は今は気が張り詰めている状況だが、知らぬ間に疲れは蓄積している。被災者のケアも必要となってくるだろう。まだまだボランティアが不足しており今後も年単位レベルで継続した支援が何よりも大事だと感じた。また並行して行政へ支援継続、罹災証明の見直しも訴えるべきと感じた。なによりも被災者一人一人の一日でも早い元の生活に戻ることを願う。　くわみず病院　村山将美